

様式第3号（第4条関係）

会 議 録

1 附属機関等の会議の名称

令和5年度 第1回丹波篠山市社会教育委員・公民館運営審議会会議

2 開催日時

令和5年7月24日（月曜日）午後7時30分から午後9時50分まで

\*傍聴の受付時間（午後7時15分から午後7時25分まで）

3 開催場所

丹波篠山市立城東公民館 2階 第1研修室

4 会議に出席した者の氏名

- |          |        |       |        |       |      |
|----------|--------|-------|--------|-------|------|
| (1) 委員   | 土性 里花  | 足立 弘美 | 宮本 英美子 | 西家 幸男 |      |
|          | 加古 佳与子 | 向井 祥隆 | 瀬戸 大喜  | 橋元 工  |      |
| (2) 執行機関 | 丹後 政俊  | 小林 康弘 | 谷掛 昭二  | 小嶋 健  | 藤井 楓 |
|          | 藤井 正作  | 岡花 宏明 |        |       |      |

5 傍聴人の数

0人

6 議題及び会議の公開・非公開の別

- |                               |    |
|-------------------------------|----|
| (1) 組織体制について                  | 公開 |
| (2) 令和5年度 社会教育関係事業について        | 公開 |
| (3) 調査研究部会の活動報告について           | 公開 |
| (4) 今年度の取り組みについて              | 公開 |
| (5) 関連行事について                  | 公開 |
| (令和5年度兵庫県社会教育研究大会における分科会について) |    |
| (6) その他                       | 公開 |

7 非公開の理由

—

8 審議の概要

- (1) 開会
- (2) 委嘱状交付
- (3) あいさつ
- (4) 自己紹介
- (5) 社会教育委員・公民館運営審議会委員について説明
- (6) 議長・副議長選出
  - ・議長 向井 祥隆 副議長 加古 佳与子

(7) 関係役員等の選出について

・丹波地区社会教育委員協議 会長 向井議長  
理事 加古副議長  
監事 土性委員

(8) 報告事項

- ①令和5年度組織体制、社会教育関係事業について
- ②調査研究部会の活動報告について

－事務局より説明－

委員：

資料3の2ページ目について。篠山国際理解センターがNPO法人格を取ったのは、2021年ではなく、2001年4月である。丹波篠山市内で、1番最初にNPO法人格を取ったのが、篠山国際理解センターである。

議長：

市内在住の外国人の方が1,000人近くおられる中で、社会教育の面で考えると、そのような方々への対応はできていないのではないかな。

教育委員会の分野として、市から委託金を出しているという面で、国際理解センターとは関わっているが、そこに関わる外国人たちとの事業をしているのかということになると、センターを通しての事業というだけであって、それを市の社会教育に反映させるようなこととか、その人たちが、何か市の行事に参画をするというようなことについては、なかなか、手が打てていないのではないかな。

国際理解センターの事業としての関わりだけではなく、市内の中に、在住の外国人の人達の居場所がもっとあってもいいのではないかな。

その人たちの居場所をつくる一つのきっかけが、今回の国際博になるのではないかな。

例えば、その人たちの母国語を活用して、通訳業務をしてもらおうとか、また、その人達にもう少し、丹波篠山のことを勉強してもらって、その国の人たちが来たら案内をしてもらおう等して、市内在住の外国人の方の居場所をもう少し考えていけたら面白い。

そのようにして、市内在住外国人の方の居場所を、この2年の中で考えていくのも、社会教育委員の立場としては、ありではないかな。

委員：

市から篠山国際理解センターが委託事業として請け負っているのは、言葉や多文化共生に向けての教育的支援である。

市内のベトナムの研修生の方が、誰にもちょっと相談が出来なくて、事件を起こしたということがあった。

最近見たSNSの記事であるが、自殺しようと思っていた女性が、「元気がないね。どうしたの?」と道で声をかけられたそうだ。それだけで、その女性は、自殺をするのを思いとどまったとのことである。

人に声をかける、人が話し合える、相談できる場ってというのはすごく大切なのではないかなと思う。

国際理解センターでは日本語教室をやっているが、日本語を教えるだけでも、2時間がすぐに過ぎてしまう。

だから、国際博が控えていることもあるので、議長のお話のとおり、在住外国人の方の居場所を考えていく時期ではないのかと思う。

委員：

資料3の2ページ目、医療通訳に関する課題について、「市役所の担当部署につなぎ、情報共有を図るとともに担当部局と国際理解センターが協議し、解決に至った」とあるが、どのような解決に至ったのか。

事務局：

担当部局に対し、前担当から話を繋ぎ、解決に向けて動いていたのは聞いていたが、最終的にどのようなになったのかは確認できていなかったもので、調べてまた報告させていただく。

議長：

国際理解センターからも、市の方に国際理解センターの業務を返し、市で取り組みができる体制・組織を作ってくださいと話をしたはずだが、できたのは国際博担当の部署だけで、そこが全て担うといったらそうではなく国際博だけの担当である。

日本語教室「うりぼう」等の委託業務の窓口は教育委員会のままである。

事務局：

国際博をやるということで部署ができたが、そこに国際理解センターなどのつながりが強固になって、どうなったかというのは明らかにはなっていない。

ただ、国際博自体も、今後、議論をしていく組織の発足式があり、そこからスタートと聞いている。地域や自治会には、「丹波篠山市として国際博として何ができるのかを皆さんで考えてください」という投げかけはできている。ただ、今はそこまでである。

委員：

国際理解センターに今年も一度お伺いをして、今どう考えておられるのかというのもフォローアップしたい。

国際博などで必ず救急案件が発生するのは目に見えている。以前からも課題として会議に挙がっていたテーマであるので、今年も考えていきたい。

議長：

国際博に来られた外国人の中で、急病者が発生した際、どう対応するのかという所まではまだ決まっていないと思われる。

委員：

急病者が発生した際、結局国際理解センターに電話したということでは、何も変わっていない。これまで、問題を抽出しても解決していない、の繰り返し。このままでは何にもならない。とりあえず前に進みたい。

## (9) 協議事項

### ①今年度の取り組みについて

—事務局より説明—

議長：

今年度の取組について、一つは挨拶で提案させていただいた、2年後の丹波篠山国際博開催に向け、何か、在住外国人の方に対して何かできないか考えていくということで、これからの2年に限っての特化した取組としてということにしたいと思う。

他にも課題は多々ある。例えば、子供たちの居場所づくりについて。

資料「令和5年度 丹波篠山の教育」の2ページ目、教育長のあいさつの中盤に「協働的な学び」ということで『協働』という言葉が使われている。

しかし実は、協働という言葉は「参画協働」という四文字熟語から来ている。なぜかというとなら協働だけでは居場所は作ることはできない。参画してこそその居場所である。子供たちが、ちゃんとした自分の居場所をそこに作ろうと思ったら、参画してこそその居場所である。例えば、地域で祭りをする際、祭りの企画をして段取りを進めている人のほうが、ただ単にお祭りに参加する人より喜び・感動が大きく、学ぶ部分も多い。

「参画協働」の『協働』という部分だけでは、学びの面から言えば半分である。

そのため、参画という言葉が入らないと、本当の意味での居場所、充実感というのは得られない。

そのため、先日開催されたふるさと一番会議において、「参画」という言葉を入れてほしいと提案した。ぜひ、教育委員会事務局としても検討いただきたい。

「協働的な学び」ではなく、「参画協働の学び」とすべきではないか。

その考え方というのが、社会教育を進めていく上で非常に大事な仕掛けである。

全て公民館職員が計画をした事業に、市民へ参加を呼び掛けるというプログラムは、もう協働の呼びかけでしかない。

事務局：

教育長のあいさつの文面で言うと、「学校教育においては」という文脈で限定的に使用している言葉である。学校教育の子供たちを対象にしているという観点からの記述であるため、『協働』という表現をしている。

議長：

学校教育の分野においても、『参画協働』としないと、ちゃんとした形にならないのではないかと。

プログラムとして、子供に考えさせる、想像させるために、その場に子供を参加させようというのは、参画であると考えます。

その考え方が、学校教育の中でも大事であり、社会教育においても大事である。市民と一緒に計画を立ち上げてもらうところから参加してもらい、意見を言ってもらったりして、自分の居場所を作ってもらうことの仕掛けが出来ないと。

公民館の職員が一生懸命、プログラムを組立てて、「さあ市民のみなさん、来てください」というだけの社会教育の講座というだけではいけない。

丹波篠山市で成功している事例として、「文化講座」がある。

文化講座は、参加者である市民が計画する。自分が行きたい所や見たい所、学びたいことを自分達で計画して参加されている。そのような仕掛けはやはり必要である。

その辺りをうまくコントロールしながら仕事にしていくのが、今の公民館職員や社会教育に携わる者には求められている。

「参画」という形で参加した人は、ずっと自分の居場所がそこにできるから、そこで

頑張ってくれるが、「協働」という形で単なる参加者として参加した人たちは、1回きりというような参加の仕方になってしまう。満足度がそれで終わってしまう。

地域づくりなんかは特にそうである。地域づくりに参加してもらうには、参画をする、つまり、実行委員会を頻繁に開催しながらプログラムを組立てて、一つのイベントにしていくという手法をとらないと盛り上がっていかないと私なりには思っている。

事務局：

今のお話しの「協働的な学び」についてであるが、学校教育は、あらかじめ参画ありきの活動だと捉えている。

そのため、学校教育に参画ということを考える場合には、一般市民の方々が学校へ協力するという視点であれば、「参画協働の学び」という記述はいいかもしれないが、ここでは、「学校教育においては」で始まる文章の中で使われている言葉であるため、「協働的な学び」でいいのではないか。

しかし、社会教育を前提とするならば、「参画」と「協働」というのは、横並びでないと意味をなさないと考えるので、それから言うと、この文章において、「学校教育においては」という言葉に加えて、「社会教育においても」といった趣旨の言葉があれば、「協働的な学び」ではなく「参画協働の学び」とするべきではないかと考える。

議長：

今学校の先生がされているのは、盛んに子供たちに考えさせるという手法でやられているのはよく分かる。

それでは、「協働」だけの参加の子供たちの学びというのはどういうことになってしまうだろうか。一緒にやりましょうということだけである。

事務局：

「参画」というのは、対象者を決めずに、ある枠組みを作ってその中に入ってきてくださいという意味であると考えます。

しかし、学校教育にはカリキュラムがあって、その中でテーマがあるので、その中でどのように、みんなで考えていくかというのは、「協働」でいいのではないかと考える。

だから、社会教育の考え方と学校教育の考え方は、若干ちょっとその辺りが違うのではないかと捉える。

議長：

「参画」というのは、「参加」に加えて、企画する、意見を言うということが「参画」だと考える。

「協働」というのは、一緒に何かをするということ、ともに動くということである。

事務局：

例えば、地域に対して、子供たちが活動の場所を求めて、参画と協働するというのは、非常にイメージが付きやすい。

ただ、学校の中の教育活動の中で、「参画」と「協働」というのは、相容れないニュアンスがある。

議長：

一緒に子供たちが行動することによって学ぶ部分について、それが「協働の学び」として表現をされているのだとしたら、その前に、先生方が子供たちに考えさせて何か始

めさせるということをされているという現場の実態はよく知っているのですが、言葉として、協働の言葉の前に、「参画協働」という四文字熟語にしたほうがいいのではないかと提案をした。

ほかに意見はないか。

委員：

先ほどの、国際博に向けてという話を聞いて感じたことではあるが、実は去年、12月に、職場があるJR篠山口駅の東口の階段下でベトナム人の方と一緒に、ベトナム屋台を出店し、地域の方々にお越しいただくという取組をさせていただいた。

自身としては、ベトナム人の方と初めて触れ合う場であったが、素直ですごく良い方々ばかりであったと感じた。触れ合っただけで初めて分かる部分がすごく多かった。

篠山口駅周辺にベトナム人の方がたくさんいらっしゃるということで、味間地区のまち協の方も、課題として、どういうふうにコミュニケーションをとっていけばいいのか分からないということをおっしゃっていた。

その意味では、食や観光の面から、交流を深めていくってというのはすごくいいのかなというふうに思っている。

先ほどの議長の話で、国際博を機に、在住外国人にも目を向けて、何か取組をしていくのはすごくいいというのは感じた。

それを考える上で、私は、テーマを広げることになるかもしれないが、例えば、それがまちづくり協議会や自治会の自治というものの在り方を見直していくということとセットになっていくのかなとは捉えている。

要は、そこに住んでおられる外国人の方を、住民としてどのように取り込んでいくか、自治組織にどう含めていくのかということが課題ではないかと思う。

また、その上で今年何ができるかという点について。例えば、在住外国人の方が多い所をモデル地区やモデル自治会として決めて、そういった所にフォーカスを当てて、どうコミュニケーションを図っていくかということを考えていく取組であれば、何か今年度の中で、できることがあるのではないかとイメージしてみたりもした。ただ、具体的にどこがいいのかいうところまでは踏み込めてはいない。

議長：

屋台出店に参加されたのは、近隣企業の方が中心か？

委員：

近隣企業に勤務されている方だけではなく、篠山学園の方もいた。

委員：

篠山学園の方は、寮に住んでいる人もいるが、寮を出てアパートに住んでいる人もいます。空き家だった家に住んでいる人もいます。年数が経っている人は、だいたい地域のアパート等に住んでいる。そこから、病院や施設の仕事に行っている。

最初はすごく人数が多かったが、コロナの関係で学生が少なくなっている。

私の地元のまち協も、留学生との関わりの部分では課題に感じている。最初の頃は、篠山学園の一室を借りて、住民と一緒に、ケーキを焼いてあげたり、クリスマス会等を開いていた。

しかし、なかなか学生が忙しい。勉強もしないといけないし、働かないといけない。また、コロナ禍になった、ここ3～4年は交流活動ができなかった。今年ぐらいから少しずつ活動をしていけたら。

委員：

私の在住集落では、結構、外国の方がおられる。コロナがあったこの3年間は、地域の行事は何もなかったが、その前は、夏祭りに呼んで参加してもらったり、子ども会の行事でも、中国の方に餃子づくりを教えてもらったりしていた。

ただ、長く住まわれることで、やはり問題も発生する。

例えば、ごみの問題。前からいろんな言語で書かれても、もう本当にルールを守らない。また、夜中にうるさくされるという話も聞く。国によっては、盛り上がりすぎることもあるかもしれないが、やはり、日本のルールとして、覚えてほしい。

実際、外国人の方の生活を守る一方で、そこに住んでいる日本人のことも考えてほしいという話をされた方もおられる。

だから、外国の方たちを受け入れて、いろんなことを知ってもらう。そこから、日本の文化を学んでもらったりすることで、先ほど言ったゴミの問題等を解決できるのかなと考え、市全体のイベントに呼ぶよりも、まず地域で、そういった外国の方に来てもらったり、呼んだりとかするほうがいいのかと思う。その仕掛けをどうしていくか。

委員：

一律に全ての方を当てはめようとしても、全ての方が当てはまるわけではない。以前、とある集落の古民家に外国人の方が住んでいたが、夜、余りにもうるさかったために、追い出されたという話を聞いたこともある。きれいごとを言えば、仲良くしたらそれはそれでいいし、もう本当に素直な人が多い。国際理解センター主催の行事に行ったら分かるが、本当に様々な外国人に出会うことができる。本当に真面目で勉強熱心な方も多い。挨拶も、日本人よりも丁寧にしてくれる。しかし、そういう人もいればそうではない人もいる。その方々はその方々で、関わっている地域が必ずどこかにあると思う。

たまたまコロナ禍があって集まれない期間があり、実際、気持ち的には今もまだもうちょっとというところであると思うが、国際博があと2年くらいということで、そのくらいになったら、コロナのことを気にすることなく集まることのできるのではないかな。

しかし、コロナをきっかけに生まれた「周りの人々に対する壁」はとても強固なものである。そのため、一つのイベントで一気に外国人の方との距離を縮めるよりかは、ちょっとしたところから、やっていく方がよい。外国人の方の出身国のお国柄もあると思う。

私の父が住んでいるハイツには、上の階にも下の階にも、外国人の方がおられる。川沿いを散歩していると、その川で、同じハイツの外国人がエビを釣っているのを見かけたりする。大きな魚を釣っていることもある。

日本人からしたら、すごいものを取って食べるのだなという感覚になると思う。でも、そうではなくて、何か目的があるのだろうけれども、その部分の対話がないと、相互理解には繋がらない。

あとは、枝豆の時期になったら、私の父は、周りの外国人にお裾分けをしている。やはり、近所付き合いというのは非常に大事なのではないかな。

委員：

今度、地元集落で夏祭りが予定されている。その企画会議で、やはり外国人の方が多いということで、例えば、実現には至らなかったが、ブラジルの人にサンバを踊ってもらったという案は出ている。少なくとも、皆さんに来てもらえたらということで、チラシだけはしっかり配布した。

議長：

そういった仕掛けの中に、日本語の堪能なリーダー格のような人に、実行委員会のメンバーに入ってもらい、村の役員だけで決めるじゃなくて、そういった人たちを呼び入れるような仕掛けをすると、少しまた違った形の取組になってくる。

「私たちがサンバをやる」といった話が、自分らのほうから出てくると思う。

委員：

篠山学園も、初めの頃は、デカンショ踊りに参加させてあげたいということで、講師を呼んで、練習したことがあった。また、学園にはベトナムやタイとか、色んな国の出身の生徒がいるが、彼らがそれぞれ、自分の国の料理を作り、地元住民との交流会を実施したりもした。

結構、コロナ前は、交流をしていた。

議長：

その意味では、今年からまたオープンになりつつあるので、そういった交流事業がまた復活していけばよい。

委員：

お祭りは共通の言語かもしれない。

委員：

私の事業所で今、ベーグルを作っている。時々、外国の方が買いにこられる。

近くに工場があり、そこで働いている若い労働者の方が 10 人ぐらいで押し寄せたりする。普段は、接することがないため、どうしても身構えてしまったりするが、その人たちは、「ベーグルがおいしい」と言ってくれたりする。そういうきっかけを大事にしながら、外国の方との交流を深めていければと思う。

委員：

正直、私が住んでいる地域のことを言わせていただくと、外国人の方はおられない。国際理解と言われても、ピンと来ないというのが正直な気持ちである。

万博も近づいているということであるが、地域的に本当に盛り上がっているのかどうかは疑問。盛り上がっている所とそうでない所で、すごく温度差があると思う。そのため、あまり関心のない所にも押しかけていけないのかなと感じる

あと、外国人の方の話が話題に挙がっていたが、地域の色んな祭りの中に入っていたいて、子供たちと交流する機会もあつたらいいかなとは思う。

私も子供の関係で、小学校・中学校と関わらせてもらったが、実際には、外国人の子供さんが在学中にはおられなかったもので、分からない部分がある。

ただ、先程、色んな話が出ていた中で、救急の場合や、事件とか事故の際に警察と関わる場合、その際の体制はしっかり整えておかないといけないのかなと感じた。

議長：

本日の会議の中だけでも、様々な話が出る。もう少し、他の人たちも巻き込みながら、研究を深めていくような形にしたらどうか。今年の調査研究部会の取組については、丹波篠山国際博に向けての、在住外国人の人たちの学び、居場所作りというテーマにして、研究協議するのはいかがか。



委員：

そのテーマが全てというよりも、委員の皆さんが考えるテーマをあと一つくらいは選ぶのはどうか。

今までやってきたことのフォローアップ、プラスアルファのイメージでできないか。

あとは、何か途中からでも、「こういったテーマはどうか」というものがあれば、提案していただければ。

委員：

市からの諮問事項を考えるという形ではなく、私達自身で考えるということか？

議長：

調査研究部会の進め方としては、委員の中で考えていくということである。

また、新たに諮問があれば、それに対する、研究テーマも考えたらいいと思う。

しかし、諮問事項に関しては、委員の中で協議しなければいけないので、調査研究部会のテーマということにはならないかもしれない。

その辺はどうするかは、市の方から、諮問が出るか否かによる。

事務局

社会教育としての課題をどう解決に導くか、そのテーマを設けるということについては、教育委員会として、今社会教育全般を見通して、今年のテーマはこうしようということは、考えていくべきだったら、常日頃からお伝えしている。そういうところをしっかりと皆さんで御協議いただけたら。

しかし、その意味で、この調査研究部会の中で協議された中で、様々な課題も浮き彫りになってきていると思う。

これは、国際博だけではなくて、これまで、色んな幅広い見識の中で、施設を見てもらい、また状況も見ていただいたりもしている。

本市では、今年、社会教育主事の研修に、何年かぶりに1名を派遣する。

これも、やはりそういうところで新しい仲間づくりが出来、新しい知識も吸収しながら、今の最先端の社会教育というのはどういう状況であるのかということも勉強してもらって、それをまた市に還元してもらおうことも必要になってくる。その面でも非常に楽しみだなと思っている。その者が中心となって、社会教育の計画も立ててもらいながら、テーマとして、今年はこれでいきましょうといったことを提案してもらおう等、今後活躍してくれるのではないかと期待している。

議長：

少しでもアンテナを高くしたいという思いはある。

社会教育に限らずではあるが、やはり、どれだけの情報を得るようなアンテナを立てるかっていうことによって、我々の生き方も変わってくる。

私は、少なくとも、社会教育に関して言えば、アンテナを高くして、「社会教育」という言葉を聞いたときに、他の人よりもピンとくるような生き方はしておきたいと思う。

## ②関連行事について

(令和5年度兵庫県社会教育研究大会における分科会について)

事務局：

資料4について。令和5年11月29日（水）に開催される「令和5年度兵庫県社会教育研究大会」において実施される分科会について、今年度、丹波地区（丹波篠山市・丹波市）が分科会の1つを担当することとなる。

最終、役割分担については、丹波市と協議することとなるが、一旦、本日の会議で、役割を決めておきたい。

なお、前回、丹波地区が分科会を担当した際は、丹波市において実践発表等の役割を担っていただいたことから、今回は丹波篠山市側で実践発表等の役割を担うこととなる。

<協議の結果、以下のとおり役割を決定>

全体会の謝辞　　・・・向井祥隆議長  
分科会 実践発表・・・瀬戸大喜委員  
分科会 助言　　・・・加古佳与子副議長

なお、「分科会 司会」「分科会 記録」については、後日、丹波市側との協議により最終決定する。

(10) その他  
－事務局より連絡－

(11) 閉会　　加古副議長